

チェンマイ大学での貢献 (63)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

筆者は人生とは自らがこの世に生を受けたからには何か果たすべきものを背負っているのではないのかと考えて来た。特にチェンマイ大学での居候が10年を超え、これまでいったい何を為してきたのかとの回顧に基づきこれまでの人生、生き方を見つめ、検証しあらためて何が自らが成すべきミッション (Mission) なのかを問うことは意義があるとの認識に達した。その意味で人生とは自らのミッションを探し求める旅 (Journey) と位置づけている。定年退職を済ませ残りの人生を如何に生きるかと言う事がより重要である。と言うのも個人差はあるものの物質的に富める状況を作っても持って行けるものでもない。持てる技量と知識をいくらかでも継承できればそれがより重要な事ではないかと考えている。

筆者の人生で大学との関わりは、学部、大学院、教員、客員教授 (三重大学、チェンマイ) を含めると半世紀に3年ほど満たない年数に成る。これからどうなるかは別として、考えてみれば大学から一步も外の世界に出たことの無い I Y I (Intelligent Yet Idiot、世間知らずの知識馬鹿) である。また筆者は自らが独り息子である事から、わがままな人間と思われたいとの意識を強く維持してこれまで生きてきた。大学が身勝手に、時には傲慢、時には極めてエクセントリック (Eccentric) な人種の集まりであり、種々の異常なまでのキャラクタ (Character) を有する人種が構成する別世界の組織である事は十二分に認識してきた。およそ一般社会では受け入れられない非常識が大学内では常識としてまかり通っている。それが大学である。逆な見方をすれば大学にしか行くところが無い人種の集合体が存続しているのが大学でもある。類似の組織に官公庁がある。国立大学は行政の管轄下にあり指導を受ける立場にあるから類似しているのも頷ける。本来、国民の公僕であるべき立場にある者が余りにも上から目線である事が顕著な一例である。大学を含めてそうした機関の共通点 (類似点) は協調 (協力) 性がなく、学問の「自由」の名の下に教職員各自が好き勝手に行動している。だから、そこで教育を受けて社会に輩出される人材の多くは協調性がない。礼儀作法も乏しく「自由」であるから何事も通ると言う勘違いが個人の精神を支配している。企業では協調性がないと組織が崩壊するから、流石に管理が行き届いている。しかし組織の利益のためには時折常識を越えた対応も少なからず見られる。大学は教育・研究のみならず独りの社会人として、いくらか許容範囲はあるものの具備すべき共通の常識を持った人材の育成がその主たる役割と考えるが、その方向に向かう為の障害が多数決である。民主的であると言うことは多数決で事が決まるから、時には正義や正論が通らない。意思決定に多大の時間がかかる。同じ内容とレベルの判断資料を持ち合わせていないから対応が遅い。最も良いと思われる組織としては一人が即断即決で判断し、意思決定する体制が良いが、そうなると代表者 (あるいはリーダー) 一人の判断が正しいかどうか問題になる。企業ではこれに近い判断、意思決定のプロセスがあるが大学は個人が「自由」を前に出し勝手なことを言うから無責任体制が生まれる。当然真剣さも薄いし責任を取る覚悟も無い。独立行政法人化しても都合の良いところだけが取り入れられ新しいポストや予算配分が要職に就いた教職員の保身に利用されるケースが大半で実績を出して高い評価を得ると言う基本姿勢は見られない。だからオリジナル (Original) なプログラムは生まれず、何処の大学でも同じようなプログラムが右倣えでアップロード (Upload) されている。基本は予算取りであり、良くやっているというプロパガンダのために中身の無い事業に多くの学生を送り出し、数で大学の名を上げる売名作戦が横行している。海外事務所を開設したと言っても開店休業で駐在員はいない。駐在員が実際に居る海外事務所

の割合は約40%とも言われる。それでも実質の伴わないゴースト (Ghost) 事務所の存在は大々的に宣伝している。教育・研究を通じた人材育成に対する「真剣さが余りにもない」の一言に尽きる。日本でも国立大学の教職員の副業は禁じられてきた。大学院博士課程をすんなりと終わると年齢は27才になる。就職しても助手の身分では給料は少なく、致し方のない事情も裏にはある。しかし副業の方が本業に成るととんでもない事が生じる。具体的には教員が妻の名義で進学塾を建て、大学での本業をそこそこに帰宅して塾に足を運ぶ。副業が本業になって居る具体的事例である。結果は明白で研究業績は上がらないから昇格・昇級は難しい。そうした教員の数が増すと博士課程設置がむずかしくなる。ただでさえ教授の数が極めて少ない状況の下で、後に続く若い世代がそうした意識で勤務していると大学は凋落の道を通ることは容易に想像できる。チェンマイ大学でもそうした事例が実際に起きている。該当の分野に在籍する教員の殆どが、自分たちの将来構想に全く無関心であるかに見える。関連の年次大会にも出席せず、出席しても学生に発表させるだけで自分はしない。研究発表をしないから、外部の大学にはその大学の同じ分野の教員が何を為しているか一向にわからない。いわゆるアクティビティ (Activity) が極めて低いから教員の知名度が低く、他大学からその分野の大学院を目指す学生は減少する。優秀な学生が出てきても進路指導ができない。とってつけたようなわか仕込みの指導では文献調査が不十分で本当に何処まで博士課程を志望する学生が準備をしているかを見るために、もっと多くの関係文献を読み研究計画を作り直して提出せよと言うと、それっきり応答はなくなった。これは「学生に非があるのでは無く、指導教員が「こうした事をやれば良いのではないか」と言う程度のアドバイスしかできていないから急に準備ができない。優秀な学生もタイムリー (Timely) に、機会を逃さず適切なアドバイスを為ておかないと間に合わない。折角の優秀な学生にチャンスを提供できない。わが国では博士課程の学生指導をするには、文科省が指名する審査員の審査に照らしてそれなりの資格にパスしなければならない。わが日本国では主として教授がその対象になるが助教授でも優秀な人材に限り希にパスする。教授のポストにある教員が全くおらず、最高位が助教授でその他はそれ以下の職階と言うのでは博士課程設置が不可能なことは論を待たない。自らが占めるポジションに対する責任感と義務を理解して居ない。日本でもこの種の教員がいない事は無いが、タイでは昇級・昇格制度が異なり自薦でもその機会を作り出すことができるから、これはもはや教員自身の怠惰以外の何物でも無い。大学院修士課程の学生数が年々減少し、研究分野はかろうじて残っても学部教育カリキュラムでは対象学生の募集が停止となった。それでもその状況が生じた原因が自分たちにあるとは認識していない。研究ができないのは予算が少ないからだと言っているが、予算を用意して研究機会を与えても感謝の気持ちもない。こうなると一般の社会常識すら疑われる。そうした認識の教員のもとではその教員以上の人材は育たない。何が彼らをそうさせているのかはわからないが、一度手に入れた教員のポストに安住し切っているかに見える。組織が発展しない最悪の原因は構成員の「無関心」であるとはよく言ったものである。筆者もこの状況に無関係では無く、学生の募集が亡くなりカリキュラムから関連科目が消えると失職する。それが現実化してきた。そういうわけでこれまで10年余におよび在籍した「機械工学科 (Mechanical Engineering Department)」から「生産工学科 (Industrial Engineering Department)」に移籍した。担当講義も「産業・環境インパクトアセスメント (Industrial Environmental Impact Assessment)」を分担することになった。客員教授の場合、個人で講義を持つことは許されずかならずカウンタパートの教員とシェアする形になっている。もちろん実質100%を負担しても差し支えないが2人の間で相談合意が要る。新しい学科という環境の中で胸を弾ませ、今か今かと講義を始めるのを心待ちにしていたが、あいにく学生への企業の就職説明会などが重なり、折角の期待が次々と裏切られ失意の中にいた。ところが関係の教員から急に特別講演の要

請があった。朝の授業のために教室に行ったが学生は上記の様な事で一人も姿を現さず、またしても・・・との思いはあった。それだけに特別講演を今日の午後やってくれないかと言われても、「自分は大丈夫だが学生が集まるのかと言う懸念があった。しかも生産工学科の学生のみならず生産工学科が主催で工学部の他学科の学生を動員すると言うので余計に懐疑的であった。2時間も前に講演会場に足を運び下見に行った。すると大きな傾斜 (Slope) 階段のある会場は空調がかけられ部屋の温度を下げる準備が成されていた。それでも朝の事 (学生が一人も来なかったこと) を考えると安心はできなかった。どうせ来ても少ないに違いないと信じて疑わなかった。講演の開始時刻が近づき会場に足を運ぶと、驚いたことに多くの学生の姿が目に入った。大変な驚きであった。講演の演題は「グローバル技術者の役割 (Role of Global Engineer)」で内容は

- 1) タイが農業国から工業国に舵を切った。これによって国民の収入 (所得) は確かに増えたが、農業人口は未だ40%もある。小規模農業では農家収入を増やすことは難しく、兼業化により収入は増やせても農業の振興はできない。早晚規模拡大が必要となる。大規模農業には機械化が不可欠で、特にハイテク (High Technology) の導入・適用・普及は避けられない。タイのみで無理というのであればASEANと言うコミュニティ (Community)での対応が望ましい。
- 2) 海外、特に日系企業を工業団地に誘致して経済振興を図った。タイにある日系企業数は少なくとも3,000、小規模の関連企業を含めると6,000とも言われる。
- 3) 新たなタイの産業分野として、a) 自動車、b) コンピュータ・電子関係、c) 食品加工、d) ツーリズム、e) 医療、の5つがある。これにより雇用機会を創出することで経済振興とその安定成長の意思はできた。しかし収入増で裕福にはなったが、この5つの分野でタイ・オリジナル (Thai original) はあるかと尋ねた。
- 4) 技術移転だけで経済の安定振興を長期にわたり維持できない。
- 5) 移転された技術をもとにタイ・オリジナル・ブランドを創成することが重要で、それこそ将来を担う「貴方達の果たすべき役割である」事を強調した。さもなければ何時までも他国 (貿易相手国) からの技術移転に依存しなければならないことを説いた。
- 6) それには学祭的 (Inter / Multi Disciplinary) な知識が必要で、エンジニアリングと言う分野全てに興味を持ち、異分野の技術者とコミュニケーションを取れるレベルの知識を積極的に習得する努力をすべき必要性を強調した。できれば、分野を問わず工学全域をカバーする為にも全工学 (Holistic Engineering) の学習に取り組むべく心がけよと説いた。
- 7) グローバルエンジニアとして如何なる基礎知識と能力を具備すべきかは、以下のように成る (チェンマイ大学工学部元副学長…学部長アカチャイ・サンイン氏の講演発表から)。具体的には4項目ある。以下はそれらを示す。
 - a) グローバル言語 (英語) によるコミュニケーション能力 (Global language skill)
 - b) コンピュータ (言語) 利用能力 (computer language skill)
 - c) 管理運営能力 (Management skill)
 - d) 国際的資金調達に関する知識と応募利用能力 (Knowledge of International Finance)

また、人材育成を司る大学の具備すべき姿勢、およびその大学で教育を受ける学生が具備すべき能力を以下の図で示す。2時間弱の講演でどれだけの学生に、どれだけ強力なインパクトを与えたかを知るにはしばしのタイム・ラグ (Time lag) があるが、興味ある者は講演資料のPPTをコピーさせるから申し出よとアナウンスすると2人の学生がUSBメモリーを持ってやってきた。正直嬉しかった。以下の写真はその時の聴講学生の様子である。

英語での講義であるため、理解度も興味のあるところである。しかし聴講学生の数の多さには驚きであった。「何だ言えば集まるじゃないか」と言う反論も為たくなる2時間であった。

Four Additional Skills for Global Engineer
By Dr. Akachai Sang-in, Former Vice President of CMU, Thailand

- English language skill
- Computer language skill
- Management skill
- Knowledge of international finance

Fig. 1 グローバル・エンジニアとして具備すべき4つの能力(Skill)

UNIVERSITY EQUIPPED

University	Graduate
• EQUIPPED	• EQUIPPED
• 1) Excellent	• 1) Experienced
• 2) Quality	• 2) Qualified
• 3) Up-to-date	• 3) Understanding
• 4) International	• 4) Intelligent
• 5) Pioneer	• 5) Potential
• 6) Professional	• 6) Personality
• 7) Efficient	• 7) Ethics
• 8) Direction	• 8) Dedicated

Fig. 2 大学と学生、双方が具備すべき能力



Fig. 3 工学部学生対象の特別講演「グローバル技術者の役割 (Role of Global Engineer)」